

一流母は"エルメスを切られても怒らない"

2018.6.18

名を成す人や社会的な成功を収める人は、子供だったとき親からどんなフォローを受けてきたのか。キャリアコンサルタントの菅原亜樹子さんは「一流の人は小さい頃に好きなことに打ち込み、親はそれを全面的に応援し、否定しない」と話す。その流儀とはどんなものか――。

何かに熱中し没頭する子供は「一流」になる

スポーツ選手やアーティスト、漫画家、将棋棋士、起業家、宇宙飛行士など、その道を究めてきた人々は、どんな子供時代を過ごし、親はどのように関わったのか。

キャリア教育を通して子供たちをサポートするNPO法人「夢さがしプロジェクト」代表の菅原亜樹子さんは、これまでに150人あまりの著名人にインタビューし、『夢さがしエトセトラ』『だから、一流。』といった著書にまとめてきた。

菅原さんは、名を成した著名人の「子ども時代」を振り返ることで見えてくるものがあったという。それは「彼らはとことん好きなことに打ち込み、親はそれをとことん応援していた」ということだ。

▼子供のまっすぐな思いを否定しない

例えば、宇宙飛行士の星出彰彦さんは、菅原さんに取材され「小学生の時にアニメ『宇宙戦艦ヤマト』の世界に夢中になった」と答えた。そして、小学校4年のときに「宇宙飛行士になって、宇宙に行きたい」と作文に書いたそう。

当時、まだ日本人の宇宙飛行士は存在しなかったが、その後もずっとこの夢を持ち続け、家族もそんな星出少年の様子をずっと見守りながら応援したそう。菅原さんはこう語る。

「子育て中の親御さんに私がアドバイスできることは、お子さんが何かをやってみたいと

言い出したとき、その思いを理解し応援してあげることです。『難しいから無理じゃない』『やめておいたら』と、心配になって言いたくなる場合があるかもしれませんが、まずはお子さんのまっすぐな思いを否定せず、自信を持たせてあげることが大切です」

「エルメス」をハサミで切った子供に母が言ったこと

ロボット博士として知られる千葉工業大学未来ロボット技術研究センター所長、古田貴之さんに聞いた幼少時のエピソードも印象的だったと、菅原さんは語る。

古田さんは小さい頃、「鉄腕アトム」の天馬博士を見てロボット博士に憧れていたこともあり、当時からモノを分解するのが好きだった。家にあった時計やラジオなど、手当たり次第に分解して遊んでいたそう。ところが、そんなある日、事件が起こる。

「あるとき、お母さんが大切にしていた（高級ブランドの）エルメスのスカーフに興味を持ち、なんとハサミでじゃきじゃき切ったそうなんです。その光景を目撃したお母さん。内心、大きなショックを受けたはずですが、怒ったり叱ったりせず、こう息子に言ったそうです。『どんどん切っていいわよ』。このエピソードを、父母を対象にした講演などで披露すると、会場がどよめきます（笑）。古田さんは『今はエルメスのスカーフが高価であるとはわかるだけに、母にととても感謝している』『今の自分があるのは、いつも自分のやりたいことを応援してくれたお母のおかげ』と話していました。また、講演後、『私も古田先生のお母さまに少しでも近づけるよう、子どもの個性を大切にしていきたいと思いました』といった感想をいただきます」（菅原さん）

▼「分解好き」の子はロボット博士になった

「個性」を伸ばすということは、その子がやりたいことや興味あることを引き出すこと。同じ屋根の下で育つ兄弟姉妹でも異なる「個性」を持っているから、親はそれぞれに適したアドバイスをしたり、得意なことや興味を持ったことを認め、サポートしたりして、自信を持たせる。そうした「成功体験」がその後の人生にプラスの効果をもたらすのではないかと、菅原さんは言う。

前出の古田さんは“分解好き”という個性があったからこそ、いろんなモノの仕組みを知り、モノを作ることへの興味が膨らみ、今やロボット研究者の第一人者として大活躍しているのだ。

親は子供が熱中できることを聞いてあげる

ただ、子供が幼少時に自分がのめり込む対象を見つけることができないケースも多いだろう。そんなときはどうしたらいいだろうか。菅原さんは語る。

「お子さんが何をしたいかわからない、またはやりたいことがあっても言い出せないでいると感じたら、まずは話をじっくり聞いてあげてください。『何をしているときが楽しい？ 何が得意？』と、その子が興味を持つ方向性を探りながら、聞いてみてください。このとき親が先回りすることなく、焦らずに答えを待ちましょう。答えは子ども自身が持っています。親はいつも応援する気持ちで聞いてあげるのがいいですね」

さらに、菅原さんが父母講演会などで訴えるのは、親自身も何か夢中になれるものを探してそれを積極的に実践することの重要性だという。

「多くの親御さんは、家族や子供のためにと、自分のことは後回しにしているのでしょうか。でも、親御さんの生き生きとしている姿こそがお子さんへの励みになるのではないのでしょうか。私の大好きな言葉に、“夢のタマゴ”というのがあります。これは、ノーベル賞を受賞した小柴昌俊さんが母校の生徒に向けた言葉。『夢のタマゴを持ち続けて頑張ってください。道は開けるかもしれないよ』というメッセージです。小柴さんが言う通り、夢のタマゴは温めておくことができます。親も子もやりたいと思ったときがスタート地点。遅いということはありません」

※雑誌『プレジデントFamily』2018夏号では、「『熱中体験する子』がグンと伸びる！」と題した特集の中で、子供時代の熱中体験が将来的な成功につながりやすいことや、子供が思い切り何かに打ち込める家庭の条件、菅原さんによるコラム「一流を育てる親」のほか、何かに熱中している小中学生6人のルポなども掲載している。ぜひ誌面をご覧ください。